日本人大学生における「学習者中心型の英語教育」についての一考察：英語授業の改善にむけて

加藤　澄恵

はじめに

2003年文部科学省が、「英語が使える日本人」の育成のための行動計画を打ち出して久しい。この計画は、中学校、高校の６年間の英語教育を終えると英語で外国人とコミュニケーションができる、大学での英語教育を終えると仕事で英語が使えるという目標である。そのためには、「英語授業の改善」「英語教員の指導力向上や指導体制の充実」「生徒の英語学習へのモチベーション向上」「入試での評価の改善」「小学校での英語活動の支援、また英語力のベースとなる国語力の向上」といったことも推進する必要があると述べている。「英語の授業の改善」では、「英語授業の大半は英語を用いて行い、生徒や学生がコミュニケーションを行う活動を多く取り入れる」「中・高校で少人数指導や習熟度別指導を積極的に取り入れる」「地域に英語教育に関する先進校を形成する」の三つの目標を設定している。大学教育では、全国的に授業改善の試みが進んでいる。大学の授業を学生参加型に改善し、学生の「考える力を促す授業」に関心があるようにみえる。本研究では、英語の授業の改善を取り上げ、学習者中心の教授法の観点から調査をすることを目的とした。すなわち教授法が外国語学習者に与える影響について検討することである。具体的には、検証１学習者中心の英語授業形態への学生の関心の調査、検証２学習者中心の教授法が、中学、高校で学習者中心の英語教育を受けた学習者と、受けていない学習者に分け、両者の学習者中心への教授法の影響を調査した。もし、学生の学習者中心の英語授業形態の関心などが明らかになれば、教師が学習者に対して、授業のあり方を構築できると考えられる。

研究の背景

学習者中心の教授法と英語教育

学習者中心型教授法とは、1960年代に従来の教師が指導権を持つ教師中心型教授法に不満を持った教師・教育者の中から生まれた。この概念は、Humanistic Approach, Communicative Language Teaching , Leaner Strategiesの研究成果によって提示されたものである。Humanistic Approach（人間中心主義の言語教育）は、学習者中心型言語教育に大きく影響を与え、その理念とは、１．言語指導を学習者個人に合わせること、それにより言語記号体系そのものの指導より、学習者が望む伝達する力を養成する、２．言語習得

プロセスの重要性、すなわち学習者の学習参加を重要とすることを挙げている。（Tudor 1996, p6）

学習者中心型の授業形態の特徴とは、activity organization, learner autonomy, and the course design perspective on learner-centeredness の３つでありが、本稿では、activity organization とlearner autonomyに焦点をあて、the course design perspective on learner-centeredness は触れないこととする。

Illich（1972）は、以下のように学習参加は言語習得にあたり重要であると示している。

> In fact, learning is the human activity which least needs manipulation by others. Most learning is not the result of instruction. It is rather the result of unhampered participation in a meaningful setting. Most people learn best by being 'with it', yet school makes them identify their personal cognitive growth with elaborate planning and manipulation.（Illich 1971, p44）

学習者中心型は「グループによる学習」を学習形態とし、学習者が能動的に学習に参加することで学習効果が期待できるといわれている。また、「グループによる学習」は、「リラックスした雰囲気で学べる」と先行研究から示唆され、学習効果が期待できるとしている。Deller（1990）では、クラス人数の多さ、クラス環境、学生のレベルにあっていない教科書を使うことによる学習者中心型の教授法を批判している。では、日本における学習者中心型の英語教育の効率を検証していく。金川、三崎、川島（2006）によると悪い印象を持つ英語の授業はどのようなものであったかという学生によるアンケートでは、先生が一方的に行うだけの授業が上位であった。この結果は同著による2005年度のアンケートの結果と同様である。この結果、学習者中心型が学生から支持されたといえるであろう。アラン、平木（2001）によると、伝統的な教員中心型（teacher-centered）の授業より、学習者中心型（learner-centered）の授業が授業の成果を生み出すことと指摘している。この授業の成果とは、学生のコミュニケーション能力養成において有効であることを示している。高橋（2003）では、学習者中心型の一形態であるグループワークを取り上げ、研究を行ったところ、グループワークの導入を支持した学生はほぼ100%であり、英語力向上にあたっては、グループワークを前期、後期とも取り入れた学生と、前期はグループワークを取り入れ、後期を従来の一斉授業形態に変えて、学期末に同じ試験を実施し、両クラスの成績を比べたところ、グループワークを取り入れた学生の英語力がグループワークを取り入れなかった学生に比べて有意に伸びていることを示した。前期、後期ともグループワークを取り入れたクラスの試験の平均点が、前期51.9、後期65.7、前期はグループワークを取り入れ、後期は一斉授業を行ったクラスの試験の平均点は、前期49.1、後期53.7であった。またこの研究では、グループワークがよいと答えた学生に、なぜグループワークがよいのか理由を述べているが、その理由として上位から、リラックスした雰囲気で楽しく学習が出来るからと述べられ、次に友達と協調してやれるからと述べられている。また同様に、高橋（2008）では、リラックスした雰囲気の中で、友達とあれこれ議論しながら、マ

イペースで問題を協力して解決していく「グループによる学習」はメンバーの学習意欲を高め、全体として授業の活性化を促す学習法であると結論付けている。

「リッラクスした雰囲気で学習させる」ことはいくつかの外国語指導法（The Silent Way, Suggestpedia）の指針でもあり、Krashenのいう「情意フィルター」（affective filter）を低くするのにも役立つと述べている。Creagen（2006）が学習者中心型の発音指導を行いこの指導法の効果を調査したところ、73％の学生から好意的な意見が得られたと述べている。

調査

調査協力者

調査協力者は、首都圏の国立大学、私立大学に通う１～４年生54名である。対象者は日本の中学・高校で英語を学んできており、英語圏に暮らした経験のあるものは含まれていない。

データ収集

データ収集には、質問紙を使用した。質問紙は２つのパートに分かれており、第１部では、中学・高校までの英語教育について調査した。学習者中心の授業形態であるグループワークやペアワーク、スピーキング活動などが中学・高校までの英語の授業で実施されたか否かを調査するために第1部は作成された。第２部では、学習者中心の授業形態への学生の関心を調査した。学習者中心の授業形態とは、グループワーク、ペアワーク、スキーキング活動で、学生同士がコミュニケーションをとりながら問題を解決していく授業であり、各質問項目が学習者中心の授業形態の特徴となるかを留意しながら、（19項目、７段階のリカートスケール）を作成した。（詳細な質問項目はAppendixを参照）。アンケートの対象者（回収できたもの）は調査協力者の54名である。アンケートは、2009年2月に各大学で実施した。クラス開始時にアンケートはコースの成績評価とは一切関係せず、研究目的のものであることを断った上で、回答用紙の記入方法を示し、授業中に質問用紙と回答用紙を配布した。尚、回収率は合計100％であった。

分析の方法

本研究で扱うアンケート調査項目は７段階のリカートスケールを使用し、順序尺度として扱う必要があるため、χ二乗検定ではなくｔ検定が本研究の分析方法として適切と判断した。よって２群間（学習者中心型の授業を受けた学生と受けていない学生）の質問紙による学習者中心の授業の特徴をとらえた質問紙項目のt検定を行い、２群間のデータの平均値と標準偏差を調査した。

結果

検証１の学習者中心の英語授業形態への学生の関心の調査において、質問紙の結果、最

も高い項目は上位から順に、質問２－４、英語のクラスでは、ゲームなどを通して行うのが好きだ（5.37）、質問２-13、英語のクラスでのグループ活動は、一人で問題を解いたりするより不安は減る（5.28）、質問２－６、英語のクラスでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ（5.09）であった。また、支持の低い項目は、質問２-17、英語のクラスでは、教師と話をするのが苦手だ（3.11）、質問２-14、英語のクラスでは、教師が一方的に進める授業が好きだ（3.30）、質問２-16, 英語のクラスでは、グループ活動は苦手だ（3.50）であった。表１に示す。

表１．質問紙によるアンケートの結果

項　　目	M(SD)
Ｑ１－１　今までの英語のクラスは、学習者参加型のクラスだった	3.39（1.51）
Ｑ１－２　今までの英語のクラスでは、教師が一方的に授業を進めていた	4.59（1.55）
Ｑ１－３　今までの英語のクラスでは、ペアワークの活動をおこなった	3.39（1.94）
Ｑ１－４　今までの英語のクラスでは、グループ活動をおこなった	2.91（1.94）
Ｑ１－５　今までの英語のクラスでは、スピーキングの練習をおこなった	4.52（1.76）
Ｑ１－６　今までの英語のクラスでは、実際の場面を想定したような練習をおこなった	2.54（1.71）
Ｑ１－７　今までの英語のクラスでは、ロールプレイ（例えば、店員と客のような）をおこないながら学習をした	2.63（1.76）
Ｑ１－８　今までの英語のクラスでは､友達とコミュニケーションをとりながら学習をした	3.19（1.82）
Ｑ１－９　今までの英語のクラスでは、クラスメートと知識の交換をしながら学習をした	3.17（1.71）
Ｑ１-10　今までの英語のクラスでは、グループで創作しながら学習をした	2.30（1.34）
Ｑ１-11　今までの英語のクラスでは、グループで問題を解決しながら学習をした	2.37（1.53）
Ｑ２－１　英語のクラスでは、参加しながら英語の学習をするのが好きだ	4.76（1.52）
Ｑ２－２　英語のクラスでは、ロールプレイ（例えば、店員と客のような）を行いながら英語の学習をするのが好きだ	4.13（1.66）
Ｑ２－３　英語のクラスでは、実際の場面を想定しながら英語の学習をするのが好きだ	4.85（1.41）
Ｑ２－４　英語のクラスでは、ゲームなどを通して行うのが好きだ	5.37（1.29）
Ｑ２－５　英語のクラスでは、ペアワークで英会話の学習をするのが好きだ	4.46（1.57）
Ｑ２－６　英語のクラスでは、友達とコミュニケーションをとりながら英語の学習するのが好きだ	5.09（1.44）
Ｑ２－７　英語のクラスでは、もっと英語を使ったり、話したりしたい	4.93（1.65）
Ｑ２－８　英語のクラスでは、グループ活動が好きだ	4.59（1.52）
Ｑ２－９　英語のクラスでは、クラスメートと知識の交換をしながら学習するのが好きだ	4.72（1.43）
Ｑ２-10　英語のクラスでは、グループで問題を解決しながら学習するのが好きだ	4.48（1.63）
Ｑ２-11　英語のクラスでは、グループで創作しながら学習するのが好きだ	4.56（1.60）
Ｑ２-12　英語のクラスでのペアワークによる学習で、英語のスピーキングの力がついたと思う	4.59（1.28）
Ｑ２-13　英語のクラスでのグループ活動は、一人で問題を解いたりするより不安は減る	5.28（1.38）
Ｑ２-14　英語のクラスでは、教師が一方的に進める授業が好きだ	3.30（1.42）
Ｑ２-15　英語のクラスで、友達と会話をしたりするのが苦手だ	3.63（1.57）
Ｑ２-16　英語のクラスでは、グループ活動は苦手だ	3.50（1.57）
Ｑ２-17　英語のクラスでは、教師と話をするのが苦手だ	3.11（1.46）
Ｑ２-18　英語のクラスでは、授業の進め方・指示などはすべて教師に決めてほしい	4.09（1.12）

次に検証２の学習者中心の教授法が、中学、高校で学習者中心の英語教育を受けた学習者と、受けていない学習者に分け、両者の学習者中心への教授法の影響の調査では、学習者中心の英語学習指導を受けてきた学生は22名（40.8%）、学習者中心の英語学習指導を受

けてない学生は32名（59.2%）であり、質問紙の結果から、学習者中心の英語教育を受けた学生からの支持が高かったのは、上位から順に、質問２－４英語のクラスでは、ゲームなどを通して行うのが好きだ、質問２-13英語のクラスでのグループ活動は、一人で問題を解いたりするより不安は減る、質問２－６英語のクラスでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ であった。学習者中心の英語教育を受けていない学生からの支持が高かったのは、上位から順に、質問２－４英語のクラスでは、ゲームなどを通して行うのが好きだ、質問２-13英語のクラスでのグループ活動は、一人で問題を解いたりするより不安は減る、質問２－７英語のクラスでは、もっと英語を使ったり、話したりしたいであった。表２に示す。

最後に学習者中心の英語教育を受けた学生と受けていない学生の質問紙による差異を調査したところ、差異の大きい順に、質問２－１英語のクラスでは、参加しながら学習するのが好きだ（学習者中心の学生4.18、学習者中心を受けていない学生5.28差異－1.09943）、質問２－３英語のクラスでは、実際の場面を想定しながら学習するのが好きだ（学習者中心の学生4.41、学習者中心を受けていない学生5.22差異－0.80966）、質問２－７英語のクラスでは、もっと英語を使ったり、話したりしたい（学習者中心の学生4.59、学習者中心を受けていない学生5.34差異－0.75284）であった。学習者中心の英語教育を受けた学生と受けていない学生の質問紙の各項目において、差があるかどうかを検討するためにｔ検定をおこなった。その結果、質問２－１「英語のクラスでは、参加しながら学習するのが好きだ」$t(54)=2.87$, $p<.05$において、学習者中心型の英語教育を受けていない学生学習者中心型を受けた学生より優位に高い得点を示していた。なお、その他の項目については有意な差はみられなかった。

表２．質問紙によるアンケートの結果

項目	学習者中心受講学生	学習者中心ではない受講学生	全体	変化量	t	p
Ｑ２－１（SD）	4.18（1.71）	5.28（1.11）	4.76（1.52）	1.1（.6 ）	2.87	0.005982
Ｑ２－２（SD）	3.77（1.63）	4.40（1.62）	4.13（1.66）	.63（.01）	1.41	0.165589
Ｑ２－３（SD）	4.40（1.33）	5.22（1.29）	4.85（1.41）	.82（.04）	2.24	0.02958
Ｑ２－４（SD）	5.05（1.36）	5.72（1.02）	5.37（1.29）	.67（.34）	2.07	0.043016
Ｑ２－５（SD）	4.32（1.70）	4.69（1.38）	4.46（1.57）	.37（.32）	0.88	0.38339
Ｑ２－６（SD）	4.90（1.66）	5.28（1.17）	5.09（1.44）	.38（.49）	0.97	0.337721
Ｑ２－７（SD）	4.59（1.44）	5.34（1.66）	4.93（1.64）	.75（.22）	1.73	0.089753
Ｑ２－８（SD）	4.18（1.59）	4.90（1.38）	4.59（1.52）	.72（.21）	1.78	0.080529
Ｑ２－９（SD）	4.68（1.61）	4.78（1.38）	4.72（1.43）	.1（.23）	0.25	0.804465
Ｑ２-10（SD）	4.27（1.70）	4.69（1.55）	4.48（1.63）	.42（.15）	0.93	0.357363
Ｑ２-11（SD）	4.27（1.58）	4.81（1.55）	4.56（1.60）	.54（.03）	1.25	0.218376
Ｑ２-12（SD）	4.50（1.26）	4.75（1.55）	4.59（1.28）	.25（.29）	0.73	0.468641
Ｑ２-13（SD）	4.95（1.53）	5.56（1.16）	5.28（1.38）	.61（.37）	1.66	0.102748
Ｑ２-14（SD）	3.50（1.41）	2.97（1.40）	3.30（1.42）	.53（.01）	1.37	0.177677
Ｑ２-15（SD）	3.59（1.56）	3.59（1.54）	3.63（1.57）	0（.02）	0.006	.994747
Ｑ２-16（SD）	3.36（1.53）	3.53（1.54）	3.50（1.56）	.17（.01）	0.39	0.700214
Ｑ２-17（SD）	3.18（1.53）	2.91（1.33）	3.11（1.46）	.27（.2 ）	0.70	0.484825

Q 2 -18（SD）	4.18（1.14）	4.00（1.11）	4.09（1.12）	.18（.03）	0.59	0.560442

注：有意水準５％とした両側検定

考察

本研究は、学習者中心の英語授業形態への学生の関心の調査、学習者中心の教授法が、中学、高校で学習者中心の英語教育を受けた学習者と、受けていない学習者に分け、両者の学習者中心への教授法の影響を調査したものである。

まず本研究の第１目的である学習者中心の英語教授形態のへの学生の関心の調査という点では、質問２－４、英語のクラスでは、ゲームなどを通して行うのが好きだ（5.37）、質問２-13、英語のクラスでのグループ活動は、一人で問題を解いたりするより不安は減る（5.28）、質問２－６、英語のクラスでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習するのが好きだ（5.09）であった。これらの項目は、学習者中心型の特徴であり、全体的に学習者中心型の授業形態を好む傾向があると示唆された。学習者からは学習者中心型の授業形態を好む傾向があると示唆されたが、これは従来とは違う授業の形態であり、物珍しさも加わっての回答の可能性もあり、「学生の英語力が向上する授業への移行」とは判断できない。この指導法による「学生の英語力向上」を保証するためには今後の課題となりうるだろう。しかし学習者中心型の授業とは、学習者の学習意欲を高め、授業の活性化を高める授業であると言える。その理由として学習者中心型の授業では、学習者の自主的意欲と学習者のニーズを最優先する姿勢があるからである。教師が一方的に知識を与え、指示に従うだけの授業では受動的な態度が染み付き、学習者が本来持っているはずの“学びたい”と思うエネルギーを伏せてしまうことになるからである。また、学習者がコミュニケーション能力を必要と感じたとき学習能力が上昇するとも言われている。教師が学習者の自主的意欲を高めることは、教育全般において大切なことである。学習者中心型の指導法により学生の英語能力が保証されるかという点では、今後のさらなる課題であるが、「コミュニケーション能力」に関しては、グループでのディスカッションの参加、ペアワークでのパートナーとのやり取りなどを通じて向上しているのではないかと言える。次に質問２-13と質問２－６の観点からは、仲間同士のやりとりはぜひ自分の意見や考えを言いたい、相手にこれを教えてあげたい、という気持ちがより自然な形で生じやすく、これは知的好奇心を高め、より深く理解するのを助けると指摘している（稲垣・波多野、2007）。また学生からの支持の低かった項目は、質問２-17、英語のクラスでは、教師と話をするのが苦手だ（3.11）、質問２-14、英語のクラスでは、教師が一方的に進める授業が好きだ（3.30）、質問２-16，英語のクラスでは、グループ活動は苦手だ（3.50）であった。質問２-14は、教師中心型の授業形態の特徴であり、学生は教師が一方的に進める授業を好んでいないことがこの調査から示された。その理由として、学習者はスピーキング活動を行う授業、すなわち授業では英語を使ったり、話したりすることを願っているところもあり（質問２－７（4.93））、教師が一方的に進める授業を展開することに対して学生が英語を使ったり、話したりできなくなり、この項目の支持が低かったと言えるであろう。支持が低かった3

つ目の項目、質問２-16は、学生はグループ活動を支持しており、支持の高かった項目質問２-13英語のクラスでのグループ活動は、一人で問題を解いたりするより不安は減るとともにを考慮すると、学生は、学習者中心型の授業形態であるグループ学習を高く支持していると示唆されるであろう。最後に質問２-13を検討すると、われわれ教師は、学習者に不安を不えず､英語の指導を行うよう英語学習環境を整える必要性があると考えられる。Krashen等（Krashen&Terrell, 1983）は、言語習得における情意フィルター（Affective filter）の重要性を指摘し、学習者の動機が低いとき、過度に緊張しているとき、学習に不安を感じているときなど、この情意フィルターは高くなり、言語習得が妨げられるのだと考えられている。情意フィルターが低いほどたくさんの量のインプットが可能になるならば、教師は授業において情意フィルターを出来るだけ下げなければならない。つまり内気な生徒に強制的に大勢の前で話させたり、発音の誤りを笑ったりしない、といったことではないであろうか。よりよい英語学習環境のためにも学習者参加型のグループワークやペアワークを英語の指導に取り入れ、学習者に不安を不えない授業の展開を教師は心がけるべきだと考えられる。

次に本研究の第２目的である学習者中心の教授法が、中学、高校で学習者中心の英語教育を受けた学習者と、受けていない学習者に分け、両者の学習者中心への教授法の影響を調査した結果は、学習者中心の英語教育を中学・高校で受けた学生の比率を調べてみると学習者中心の英語学習指導受けた学生が22名（40.8%）、受けてない学生は32名（59.2%）であり、学習者中心の英語教育を受けた学生と受けていない学生の質問紙による結果は、支持を受けた順では大きな差異はなかった。学習者中心の英語教育を受けた学生と受けていない学生の質問紙の各項目において、差があるかどうかを検討したところ、質問２-１だけが有意な差がみられた。これは学者者中心の英語教育を受けていない学生の方が学習者中心の英語教育を好むといった傾向にあることがこの研究から示唆された。学習者中心型を受けていない学生の方が、学習者中心型を受けた学生より高い支持になった理由の一つとして考えられることは、学習者中心型を受けていない学生が従来とは違う学習法に物珍しさに感じ、支持したともいえる。また「英語コミュニケーション能力の向上」を掲げながらも「英語読解、英語購読」の授業が中学、高校では一般的であり、学習者中心型を受けていない学生が目新しさに支持をしたとは否定できない。

まとめ

本研究では、学習者中心の英語授業形態への学生の関心の調査を行い、学習者中心型の指導法を好むという結果となった。学生からの支持の低かった項目は、いわゆる従来の教師中心型指導法の形態である。また、学習者中心の教授法が、中学、高校で学習者中心の英語教育を受けた学習者と、受けていない学習者に分け、両者の学習者中心への教授法の影響を調査したところ、学習者中心の英語学習指導受けた学生が22名（40.8%）、受けてない学生は32名（59.2%）であり、学習者中心の英語教育を受けた学生と受けていない学生

の質問紙による結果は、支持を受けた順では大きな差異がないことが明らかになった。学習者中心の英語教育を受けた学生と受けていない学生の質問紙の各項目において、差があるかどうかを検討したところ、質問２－１だけが有意な差がみられた。これは学者者中心の英語教育を受けていない学生の方が学習者中心の英語教育を好むといった傾向にあることがこの研究から示唆された。学習者中心型を受けていない学生が従来とは違う学習法に物珍しさに感じ、支持したともいえるが、積極的に授業に参加することで、学習の自主的意欲を高め、学生自ら進んでスピーキング活動に取り組んだことは発信型英語能力向上へつながるものと考えられる。

今後の課題として、まず、本研究は質的データによる分析での教授法が外国語学習者に与える影響について検討することを目的としたため、教授法が他の要因の影響を受けている可能性を否定することはできない。今後は、インタビューなどの質的アプローチでデータ収集による精緻な分析とあわせて、学習者中心型の指導法と学習の進展度やテスト結果との関係を明らかにする必要がある。

次に、本研究は調査協力者の数が極めて限られた研究である。今後も更なる調査を重ねることで、学習者中心型の調査の結果の一般化可能性を深めていく必要がある。

最後に、「授業の改善」とは、「学生に好まれる授業への移行」というだけではなく「学生の英語力が向上する授業への移行」へと導かなければならない。この指導法による「学生の英語力向上」を保証するためにはさらに調査をする必要があると思われる。

注

本稿は、大学英語教育学会第３回関東支部大会（2009年６月21日、於：青山学院大学）における研究発表の内容に基づき、加筆・修正をしたものである。

参考文献

アラン　M. コーゲン、平木隆之（2001）「社会的能力開発のための小人数グループ学習」北海道東海大学紀要. 人文社会科学系第14号　pp.167-183

稲垣佳世子、波多野誼余夫（2007）「人はいかに学ぶか」東京：中央公論新社

金川由紀、三崎リン、川島紀美（2006）「学習者中心概念に基づく平安女学院大学でのカリキュラムへの一考察」平安女学院大学研究年報第７号　pp.33-45

高橋寿夫（2003）「授業の改善に向けて：グループ・ワークによるリーディング指導」外

国語教育研究第 6 号　pp.39-51

高橋寿夫（2008）「授業の活性化に向けて―グループによる学生参加型授業の実践的考察」『関西大学外国語教育研究フォーラム―7 号―』 pp.23-34

Deller, S（1990）*Lessons from the Learner* Harlow: Longman.

Harry E. Creagen（2006）*The Learner-Centered/Communicative Paradigm In Pronunciation Teaching*. Language and culture 64 pp.71-88

Illich, I（1972）*Deschooling Society* Hammondsworth, Middlesex: Calder&Boyars.

Krashen, Stephen D. and Tracy D. Terrell. 1983. *The natural approach: Language acquisition in the classroom*. Hayward, CA: Alemany Press.

Tudor, I（1996）*Learner-centredness as Language Education* Cambridge: Cambridge University Press.

Appendix

アンケートのお願い

以下の基準で、該当する数字を〇で囲んでください。

1	2	3	4	5	6	7
まったくちがう	ちがう	ややちがう	どちらでもない	ややそのとおり	そのとおり	まったくそのとおり

Ⅰ　今まで（高等学校まで）の英語教育についてお尋ねします。

1　今までの英語のクラスは、学習者参加型のクラスだった

（ 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7 ）

2　今までの英語のクラスでは、教師が一方的に授業を進めていた

（ 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7 ）

3　今までの英語のクラスでは、ペアワークの活動をおこなった

（ 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7 ）

4　今までの英語のクラスでは、グループ活動をおこなった

（ 1 ・ 2 ・ 3 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7 ）

5　今までの英語のクラスでは、スピーキングの練習をおこなった

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

6　今までの英語のクラスでは、実際の場面を想定したような練習をおこなった

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

7　今までの英語のクラスでは、ロールプレイ（例えば、店員と客のような）をおこないながら学習をした

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

8　今までの英語のクラスでは、友達とコミュニケーションをとりながら学習をした

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

9　今までの英語のクラスでは、クラスメートと知識の交換をしながら学習をした

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

10　今までの英語のクラスでは、グループで創作しながら学習をした

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

11　今までの英語のクラスでは、グループで問題を解決しながら学習をした

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

1	2	3	4	5	6	7
まったくちがう	ちがう	ややちがう	どちらでもない	ややそのとおり	そのとおり	まったくそのとおり

Ⅱ

1　英語のクラスでは、参加しながら英語を学習するのが好きだ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

2　英語のクラスでは、ロールプレイ（例えば、店員と客のような）を行いながら英語を学習するのが好きだ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

3　英語のクラスでは、実際の場面を想定しながら英語を学習するのが好きだ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

4　英語のクラスでは、ゲームなどを通して行うのが好きだ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

5　英語のクラスでは、ペアワークで英会話の学習をするのが好きだ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

6　英語のクラスでは、友達とコミュニケーションをとりながら英語の学習するのが好きだ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

7　英語のクラスでは、もっと英語を使ったり、話したりしたい

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

8　英語のクラスでは、グループ活動が好きだ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

9　英語のクラスでは、クラスメートと知識の交換をしながら学習するのが好きだ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

10　英語のクラスでは、グループで問題を解決しながら学習するのが好きだ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

11　英語のクラスでは、グループで創作しながら学習するのが好きだ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

12　英語のクラスでのペアワークによる学習で、英語のスピーキングの力がついたと思う

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

13　英語のクラスでのグループ活動は、一人で問題を解いたりするより不安は減る

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

14　英語のクラスでは、教師が一方的に進める授業が好きだ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

15　英語のクラスで、友達と会話をしたりするのが苦手だ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

16　英語のクラスでは、グループ活動は苦手だ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

17　英語のクラスでは、教師と話をするのが苦手だ

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）

18　英語のクラスでは、授業の進め方・指示などはすべて教師に決めてほしい

（　1　・　2　・　3　・　4　・　5　・　6　・　7　）